

ナシ赤星病 (病原菌 : *Gymnosporangium asiaticum*)

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害である。

ナシの葉、葉柄、花梗、がく、新梢、果実、花卉に発病する。通常、葉の被害が目立つ。葉では、最初、黄色の小斑点が形成される。病斑は拡大、肥厚し、毛状の器官が多数形成される (図1)。病斑の形態から診断は容易である。病斑部から腐敗し、落葉する。

病原菌は、ナシとビャクシン類 (カイツカイブキ、ハイビャクシン、オオダンゴタマイブキ、シンパク、エンピツビャクシン) との間で宿主交代する (図2)。ナシから飛散するさび胞子は、ナシに感染、発病することがないので二次伝染しない。

経済栽培されている品種はすべて病性である。ビャクシン類が近くにあると発生が多い。ビャクシン類上の冬胞子 (層) が膨潤している期間に降雨があると発生しやすい。

○ 防除方法

(ア) 耕種的・物理的防除

- ・唯一の伝染源であるビャクシン類を地域内からできるだけ少なくする。

(イ) 薬剤防除

- ・ナシの展葉が始まり、ビャクシン類から小生子が飛散している期間 (冬胞子層がゼリー状に膨潤している期間) にナシの防除を行う。



図1 ナシ葉の病徴

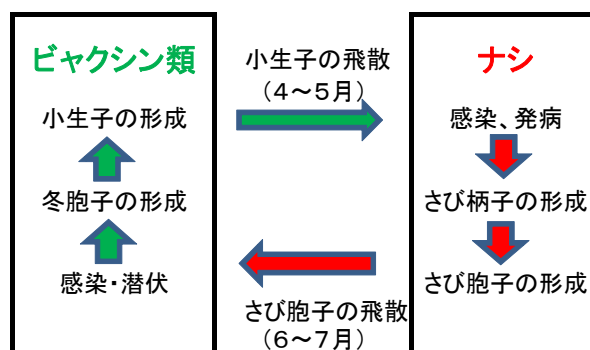


図2 ナシ赤星病の宿主交代